

---

デジタルパンク通信 第一話 2000年3月号

---

中村伊知哉でございます。はじめまして。ごぶさたしてます。いつもどうも。これはこれは。

いまフランスのカンヌです。MILIAというデジタルコンテンツの祭典、MIDEMの映像版ですな、地中海のリゾートとはいえ審査員なのでホテルかんづめです。これが済めばアメリカ東海岸のボストンに戻ります。

MIT(マサチューセッツ工科大学)はリカケイの人の集まりなので、連中ナニ言ってるのが私にはさっぱりわからん日々で困ります。でもたまに気が合って、オッサンええこと言うやんけ、などと肩くんだりしてたら、あとで聞くとノーベル賞もらった教授だったりしてビックリして困ります。

私はそこでMIT Okawa Centerというメディアと子供のための研究所を作るプロジェクトを進めています。現場監督みたいなものです。デジタルが表現や生活をどう変えるか。教育、ゲーム、オモチャはどうなるか。そういうことを世界の子供たちといっしょに開発する。たとえば、全く新しい種類のインターネット楽器を作って、新しい音楽表現を開拓してもらう、なんてことに力を入れてます。

告白。私むかし音楽を断念したんです。少年ナイフというバンドに携わるとともに、先日亡くなったボ・ガンボスのどんとたちと音出したりしてたんですが、どうにもオレ才能がないやと気づいて。で、国家官僚の権化の道を選んだのであります。結局、アメリカくんだりまで来てまた音楽と関わりを持つようになりました。音に戻れ、という定めなのでしょう。

役人の14年間は、郵便局長としての一年を除いて、一貫してメディアの行政を担当していました。パリでスパイやったこともあるんですが、それもデジタルがらみです。世間様はいまインターネットやデジタル一色で結構なことですが、ようやく波が来たなあという実感です。

でもこの波はほんの入口。これからもっととんでもないことが続々と起こってきます。ネットワーク社会はどうなるのか。この国はどうしたいのか。そんなことを考えるうち、これじゃいかんと思い、血気にはやって出世の道を捨て、国を飛び出した私です。早まったか。

でもアメリカに来たのは、アメリカに学んだり、そのすばらしさを日本に紹介したりするためではありません。そんなこと、じえんじえん興味ない。逆です。私は日本の表現のすごさを世界に発信したい。日本を表現大国にしたい。そのための道具としてアメリカを選んだんです。

インターネットはアメリカ型の商売の道具としてもてはやされてます。でも、本質はそんなことじゃない。もっと情念とか、魂に触れるものなのです。デジタルは既成の秩序や価値観をペロンペロンとひっくり返していきます。パンク野郎なのです。これからしばらく、そんなお話をして参りたく存じます。

---